

苦難の歴史を生きた先人に
思いを馳せる



十和川口②



ケーキやアイスに大喜びだった子どもたち

先月号から続く。長沢川下流域周辺、山に入った吹敷地区、道の駅とおわがある今成地区と、広域にまたがる川口地区。産土神は八坂神社で、白皇神社などが合祀されている。また、吹敷と今成を結ぶ山越えの道の途中「今成から来る人と吹敷から来る人が、ちょうど出会う場所」にミニ八十八箇所がある。ここでは春と秋にお祭りがあり「昔はにぎやかで、十川の街からケーキやアイスも売りに来て、子どもたちは大喜びじゃった」という。時代の移り変わりはあるものの、お祭りなどの行事は、各組持ち回りで今も堅実に行われている。

農地が少ない中で生きてきた人々

江戸期の地誌によれば、川口村の主な産物は「茶と楮」とある。農地となる平地が少なく、かと言って地区内の森林もそれほど深くはないので、明治に入ってから、他の地域へ山仕事に行ったり、炭焼きなどをして生計を立てていたという。「農地が少ない地区」であったことが、昭和に入って「ある悲劇」に巻き込まれていくことになる。

記憶と記録から先人の苦難を知る

戦前から戦中まで続いた満洲開拓移民政策。現地での労苦は元より、敗戦後の引き上げ時の苦難は筆舌に尽くしがたい。当時のこの国策に翻弄された地区、人々は町内にも多い。ここ川口地区もその一つで、今も体験者のご健在で、さらには重要な資料も残っている。

満洲開拓移民の形態はさまざまあったが、基本は農業移民。移民が始まって数年経ち、満洲での現実が人々の知るところとなると応募数が減少。そこで昭和12年以降に推進された、県、市町村、地区単位で割当てられたとも言える「分村(郷)移民」は、農地の少ない山村がターゲットとなり、人々に苛烈な運命を強いた。世界恐慌による養蚕業への打撃も、山村で生きる人々に容赦がなかった。ここ川口地区がそうであった。「地区で〇人」と決められ、希望しない人々も行かねばならなくなったのだった。もちろん、当時は全国の山村で同じようなことが起きていた。(参考:開拓移民数の全国最多は長野県。高知県は8位)

川口地区でどのような協議が行われ、いかなるプロセスで人選が行われたのかわかる極めて客観的な「議事録」や、当時の区長の日記が保管されている。地域の人々の生の歴史を知ることができる、まさに第一級の貴重な資料である。



まさに第一級の資料！

町のうごき

(9月30日)	人	口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,243	-13		男 2	17	10	8
女	7,791	-21		女 1	19	9	12
計	15,034	-34		計 3	36	19	20
世帯数	7,976	-20		(9月中の届出)			

窪川地域 10,715人 大正地域 2,061人 十和地域 2,258人